

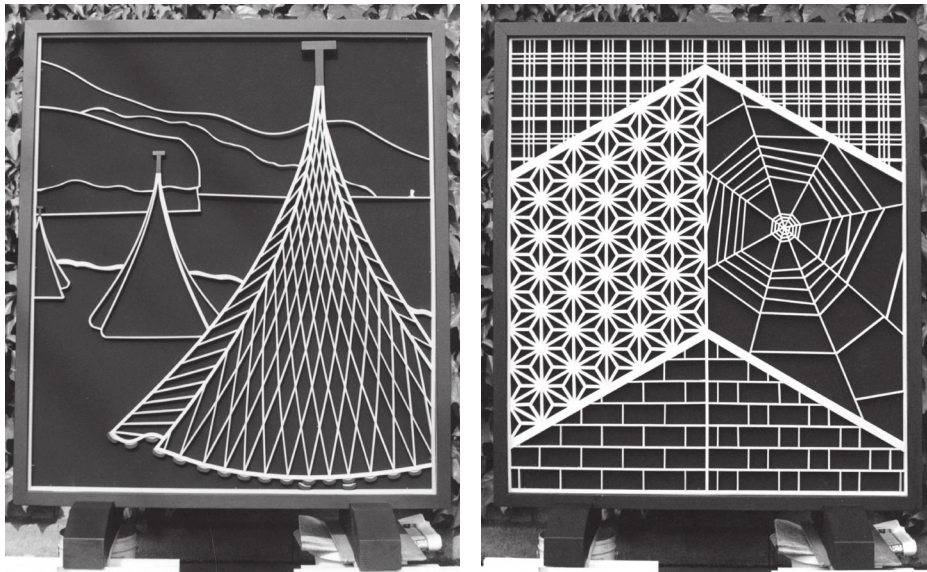
もくじ 建具職人・父新倉盛吉の足跡… P1 行政文書に見る足立区の水害記録（七）… P2 はい、文化財係です 12… P4

# 足立史談

## 第 619 号

2019 年 9 月 15 日

足立区立郷土博物館内  
足立史談編集部  
〒120-0001  
東京都足立区大谷田 5-20-1  
TEL 03-3620-9393  
FAX 03-5697-6562  
(30-309)



新倉盛吉作

組子ついたて（表・裏）

高さ九四cm・幅八四cm

## 建具職人・父新倉盛吉の足跡

### 新倉 猛



父と私  
(父35歳・私5歳)  
昭和31年1月ごろ

足立区はものづくりの職人が多く活躍してきた地域です。今回、祖父・父親が建具職人であった新倉氏に、思い出をまとめる形で原稿をいただきました。足立の職人はどのような人たちなのか、こうした記録も資料として考えたいと思います。(編)

■職人となるまで 昭和・平成と、生活をともにした建具職人であった父、新倉盛吉の三回忌を一昨年終え、その記憶を辿ってみました。

父は、大正十年十二月、足立区千住一丁目にて、群馬県高崎市出身の新倉仙太郎、志づの六男四女の末弟として生まれました。

祖父仙太郎は、建具職人「建仙」(たてせん)として、大師門前の割烹にもたびたび修繕で出入りするなど、足立区を中心に仕事をしていました。父の兄たちも、皆、建具職人、またはそれに関係する仕事をしていました。

作っていた建具は、襖、障子、引

き戸、雨戸、扉、窓枠などですが、組子や木額、木箱などが家に残っています。

父は、幼少のころ、千葉県房総の、とある家から養子に欲しいという話があったようですが、周囲から「この子を手放してはいけない」と言われ、祖父母も手元においていたそうです。

若いころ祖父のもとで修行をしていたようですが、戦争中の立川の飛行機工場での勤労奉仕、そして召集によって渡った満州(現在の中国東北部)からの引き揚げを経て千住の実家に戻りました。昭和二十二年の六月であったと聞いています。

そして祖父の仕事場で、本格的に建具職人としての仕事を始め、その二年後に、足立区梅島在住の鳥之海キクと結婚しました。結局、父は戦争中を除いて、足立区を離れず、母キクとともに祖父母の最後まで、面倒を見ることとなったのです。私の小中学生の頃のことでした。

父が祖父と仕事をしていたのは、昭和三十年ころまでであったと思います。祖父は八十歳位まで仕事をしていたようです。その後、父は独立した職人として仕事をしていました。

■千住の仕事場 さて、祖父、父の仕事場のあった当時の千住の町のことに少し触れたいと思います。仕事場兼住居があった場所は、旧

表示で千住一丁目七十七番地。旧千寿小学校（現東京芸術大学）があった所を、東側道路を北に進み、現在工事中の旧都税事務所跡に向かった中程のところです。

家の前の道路は、旧日光街道より三十cm程低く、また、当時は下水道の完備がまだ充分ではありませんでした。私の記憶では、十九歳まで住んでいた間に、板張りの仕事場が台風で数回浸水しました。その時は、家族総出で、仕事道具や道具箱を一段高い畳の居間に運んだものでした。いよいよ水が上がってくると、それを予期しているかのように、床板の隙間から大勢の虫たちが這いあがって避難してきます。いまだに、はっきりと覚えている鮮烈な記憶でした。

また、明治時代の洪水で、千住一帯も大浸水したそうです。この仕事場のあった家も、「外壁の高さ五、六尺のところまで水が上がり、色の違いが残っている。」と、祖母から聞きましたが、まだ小さかった私には、よく分かりませんでした。

■父の仕事

母から聞いた話では、千葉県中山のあるお寺の依頼で、祖父が納めた木額が、南側からの日差しにも長年耐え、少しも狂いが生じなかつたとのことでした。父はよく、「額の角の繋ぎ目が、いつまでもしっかりしているかどうかで、職人の腕がわかる。」と言っていました。また、

「仕事は、教えてもらうものではない。」「仕事は、見て覚え、後は、自分で工夫してやるものだ。」と言っていました。おそらく、祖父から同じようなことを言われ、修業したのだと思います。

父は、仕事に使う木材や釘、金具を千住仲町などの材木屋や金物屋に買いに行きました。また、道具類を台東区下谷の道具市に買いに行くこともありました。いずれも一緒に行った私には思い出のひとつになっています。

父は建具を作るとき、今のような精密な図面は引かず、完成したものを鉛筆で描き、段取りを組んでから、仕事に取り組む、と言っていました。木っ端や紙を大切にし、晩年も、カレンダーや折り込み広告の裏紙を大事に使っていました。

昭和三十年代だと思えますが、数週間ほど新潟県の佐渡に仕事で出かけることもありました。おそらく新築する屋敷などに取り付けるものを現地で作る仕事だったのだと思います。一方、まとまった仕事がない時期もありました。

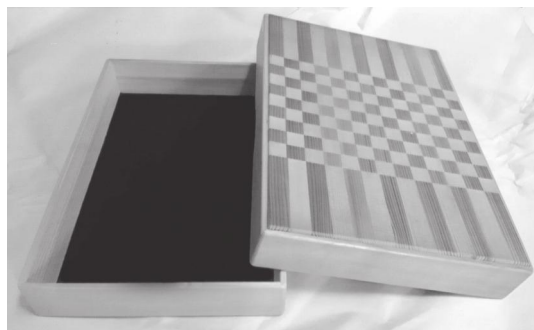
仕事が重なるときは、夜遅くまで仕事をしていました。夜、雨戸を閉め、仕事場を裸電球がコウコウと照らすなかでの夜なべ仕事。鋸を引く板の片方を母が持って手伝うなど、父と一緒に仕事をしている姿を見て、私

ども三人の子供も育ちました。

■仕事の変化

また、高度経済成長期に入るところだったと思います。父は、「これからは、アルミサッシの時代、注文してつくる木の仕事は、どんどん減っていくよ。」と言っていました。今でこそ、昔からの技術を見直そう、大事にしようという動きはあるものの、大量生産による安価なものを求める時代の勢はますます強くなりました。

いよいよ時代が変わり、注文の仕事



父の遺した作品

寄木細工風の文箱  
縦 35.5cm 横 24.5cm



組子付き照明器具  
高さ 38cm

事が少なくなると、家にあった「丸ノコ」や「角ノミ」の機械も、やがて手離すようになりました。そして、港区や江東区にある室内装飾の制作所に通勤して仕事をするようになりました。ホテルの展示会場で使うものなどを作っていたそうです。展示会場の現場に行くこともよくあったそうです。建具職人として身に付けた技能を生かし仕事をしていました。細かい仕事ができる職人があまりいなかったようで、八十歳位まで頼まれて仕事をしていました。

■晩年の父 その父も、子供たちが手を離れる五十代後半になると、趣味で山歩きを始め、写真に撮った風景や草花の写真を自作の額に入れ身近な人に差し上げるのを楽しみにしていました。また、家で使う筆筒や箱物の家具類を作ったり、子供や知人宅で建具の不具合をいとも簡単に直したりしていました。

大正・昭和・平成と生き、建具職人として多くの仕事を残し、家族を支えてきた父。実に、曲がったことが嫌いな、「謹厳実直の人」そのものでした。あと五日で九十四歳というときに亡くなりましたが、その五日前まで身の回りのことを一人でこなしていました。私が何か手を貸そうとして、叱られることも度々ありました。その父の姿から、実に多くのことを学びました。



## 行政文書に見る

## 足立区の水害記録(七)

## 山崎尚之

## ■明治四十三年の水害

『明治四十年起 出水書類 南足立郡役所』の簿冊では、四十年の水害の後に四十三年の水害の記録が続きます。ご存知のように四十三年の水害は、明治以降に発生した最大級の水害で、岩渕水門より下流の荒川(放水路)の開削が促進されることになる大きな要因となった水害です。

この水害についても「日誌」が簿冊内に残されており、水害発生から収束までの郡役所の対応を見ることが出来ます。ただし、四十年の水害の時のそれに書かれていたような、劇的なトラブルは記されることはなく、浸水と避難民の発生、その人びとへの炊き出しの実施などが淡々と綴られている：という印象です。被害自体は四十年の水害よりも大きかったはずなのですが、それなのに書きぶりはおとなしく、ルーティンをこなしているような感じ。郡役所も水害に慣れてきたのかな、というような感想を持ってしまいます。では、具体的にその内容を見ていこうと思います。

## ■水害前の浸水被害

四十三年の水害が発生する直前の

七月二十八日・二十九日に、荒川が増水して千住町・江北村・西新井村で浸水被害がありました。特に江北村の被害が多く、床下浸水が八戸と千住町の一戸、西新井村なしというのに比べると、少ないとはいえない立っています。記録を見ると、まず、二十八日の十六時に熊ノ木塚を閉戸し、二十三時には簿本塚(簿本塚の誤り、熊ノ木塚の一キロ余り下流の、現在の扇二丁目南側の荒川河川敷にあった水門)を閉めようとしています。川の水が流入して浸水するのを防ごうとしたのでしょう。

二十九日には、郡長は出水状況の視察に江北村・西新井村に出張し、引き続き千住町の荒川沿岸を視察しました。記事としてはこの程度で、後は田畑や宅地の浸水が報告されています。この浸水被害は新聞にも報じられていて、『東京朝日新聞』七月三十一日条には、「再昨夜来、埼玉県秩父地方豪雨の為め荒川筋増水し府下南足立郡江北村字鹿浜、小台付近の堤防を決壊せん勢ひなるより村民大挙して堤防の最も低き場所百五十間へ高さ一尺余の土俵を積重ねて之を防ぎたるが鹿浜村(原文ママ)の民家は五十余戸浸水したり」とあります。

浸水被害のあった村名のミスがあり、家屋数にも大きな隔たりがありますが、どちらが正しいのか分かりませんが、

ともあれ相応の被害はあったのでしよう。この十日あまり後には大水害が発生しますし、明治四十年の時にも大きな水害の後に小規模な浸水被害がありました。このように一年に度々浸水(水害)が発生するようでは、住民はその時々への対応や後始末におわれて大変だっただろうと思われれます。これはもう江戸時代からの治水対策がまったく役に立たなくなっているということで、新たな治水対策＝放水路の開削が不可避になつていったということでしょう。

## ■日誌(一)

『明治四十年起 出水書類 南足立郡役所』の簿冊では、四十年の水害の記録は、「明治四十年八月廿四日荒川出水々量調 附日誌 南足立郡役所」と表紙にしっかりと墨書されていてひとつの独立した資料のようになっていますが、四十三年の水害は、ただ「日誌」と墨書された南足立郡役所の野線用紙を表紙に使っているだけです。このあたりも事務的で素っ気ない感じがします。

さて、その内容ですが、八月七日夜の驟雨(しゅうう)・雷鳴から始まります。八日も驟雨だったので、十九時から雨量が多くなったようです。九日は十一時三十分には晴れましたが、十八時には豪雨になり、荒川は増水の模様だと書かれています。この日の午後には、佐谷田(埼玉県熊谷市の

荒川沿いの地区)の水量が約百九十五センチに増水したということです。十日は、前夜からの雨に東風が吹いて雨量が多くなりました。そしてこの日は、変化する荒川の水量が記録されています。八時の戸田橋(板橋)の水量が約四百二十センチ、千住大橋の水量が約百九十五センチに増水し、十時には佐谷田が約三百センチ、千住大橋が約二百センチあまりまで増水し、十三時には戸田橋で約四百三十センチまで増水し、一時間に約三十センチのペースで増水している」と記されています。このように雨の降りはじめには浸水被害がまだ起きていないようなので、刻々と変化していく荒川の水量のみを記録しています。しかし、これはこの後の被害の前触れのように不気味な気もします。

十五時には、千住大橋の水量が約百七十センチに減水しますが、これは干潮のためだろうとしています。その証拠に、十六時から再び増水し始めたと言っています。十九時には、佐谷田の水量が約三百六十センチにまで達し、さらに増しつとあると東京府庁より通報がありました。このため、職員三名が夜勤し、郡長も出勤してきました。


十一日四時には、戸田橋でとうとう約七百センチまで増水し、一時間に約四百センチのペースで増水しているとして、前日の十三時の一時間

約三十センチの増水ペースより多くなってきたおり、浸水の危険が迫っている様子が伝わってきます。

実は、ここまでの記録は「荒川出水日誌」という小さなタイトルが書かれた一枚の用紙に書かれていて、この用紙の後に先ほど書いた大きく「日誌」と書いた表紙がついた記録が始まります。この二つは別筆（書いた人が異なっている）ですので、分かれているのだと思われます。ただし、「荒川出水日誌」は十一日か終わっており、「日誌」は十一日から始まっていますので、記録としてはきちんと継続しています。

つづく  
(当館専門員)

はい、文化財係です12  
**続・救われた**  
**江戸時代の**  
**道しるべ**



昨年十一月に「はい、文化財係です15 救われた江戸時代の道しるべ」と題して本誌六〇九号で紹介した道しるべが今年三月に熊の木広場（江北二三四三）に移設されました。少し時間が経ってしまいました。今回は、そのご報告をしたいと思えます。

八年（一七九六）二月に建てられ、江北二丁目の路傍にあったもので、「弘法大師道」「六阿弥陀みち」と彫られており、弘法大師空海ゆかりの西新井大師総持寺（西新井一―一五―）と江戸時代に大流行した六阿弥陀詣でに関する道を指し示したものです。工事の関係で昨年十月に引き抜かれ、文化財係が保管することになりました。そして、熊の木広場への移設が妥当と判断し、移設することになりました。

熊の木広場を選んだ理由はいくつかあります。まず、熊の木広場は、道しるべが元あった場所から三〇〇メートルほどしか離れていないという事です。道しるべは立っている場所に意味があるので、出来るだけ元々立っていた場所の近くに移設するのが望ましく、その点で熊の木広場はちょうどよい場所でした。次に、熊の木広場には、明治二十五年（一八九二）五月に建てられた江北村制定記念碑と、明治四十年（一九〇七）七月に建てられた道しるべの二基が並んで立っていたことです。前者は江北村が成立した時の記念碑ですが、千住・川口（埼玉県川口市）・王子（東京都北区）・鳩ヶ谷（埼玉県川口市）に



左 道しるべ（寛政8年）  
中央 道しるべ（明治40年7月）  
右 江北村制定記念碑（明治25年）5月

至る道を指し示しており、道しるべの役割も持っています。後者は「弘法大師道」と彫られ西新井大師への道を指し示しています。三点目は熊の木広場の由緒で、「熊の木」というのは六阿弥陀伝説にちなむものです。これらのことから、「弘法大師道」「六阿弥陀みち」と彫られたこの道しるべを、熊の木広場へ移設することになったのです。

この道しるべは、これから新しい場所から江戸時代から続く歴史を伝えるとともに、末永く足立区の姿を見つめていくことでしょう。お近くにお立ち寄りの際は、是非熊の木広場を訪れて、道しるべをご見学下さい。

(文化財係学芸員 佐藤貴浩)

### パネル展示のご案内

ご存知ですか？足立区の文化財「足立区文化財パネル展―魅力あふれる郷土の文化財を知ろう―」  
 本年は、改正文化財保護法が施行され、文化財の保護活用がますます注目されています。

足立区の魅力あふれる文化財をパネルで紹介いたします。  
**【日時】** 10月7日(月) 午前10時～10月11日(金) 午後3時まで。初日・最終日以外は、開庁時間(午前8時～午後10時)

**【会場】** 足立区役所本庁舎一階区民ロビー 観覧無料  
 (足立区中央本町一―一七―一)  
**【担当】** 地域文化課文化財係  
 足立区役所南館三階  
 電話3880・5984

### 博物館のミニ展示

「郷土博物館所蔵の近代日本画」  
 博物館所蔵の横山大観、平山郁夫らの6点の近代日本画を展示しています。どうぞお出かけください。  
**【会期】** 10月27日(日) まで  
**【会場】** 足立区立郷土博物館